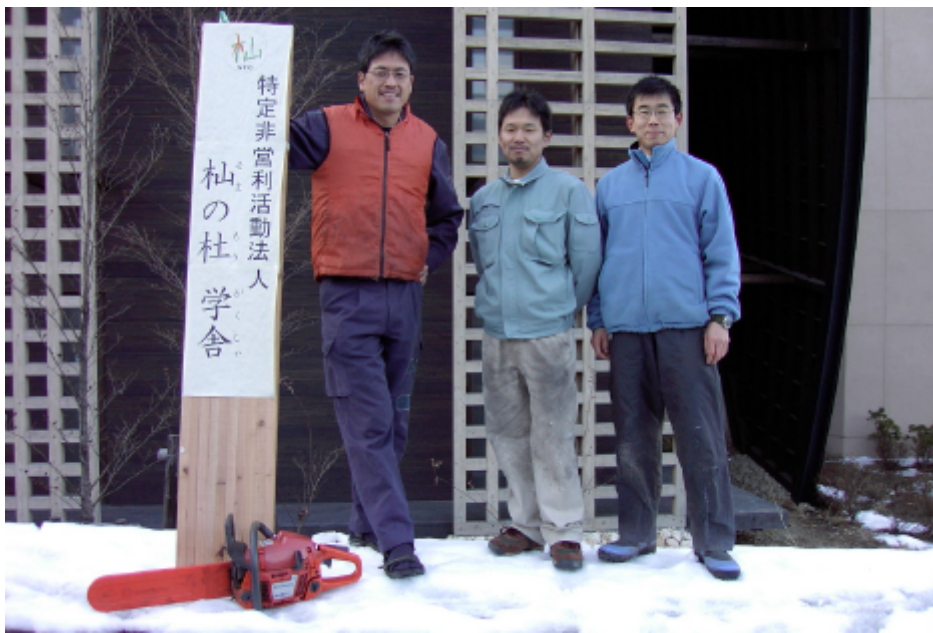


そま もりがくしゃ 私たちが 杣の杜 学舎 です！



そまもりがくしゃ

SOMAP

新しき杣人たちの羅針盤

創刊号

NPO 法人 杣の杜 学舎

〒501-3744 美濃市段町 116-1

TEL & FAX 0575-33-1189

URL: <http://www.somanomori.or.jp/>

e-mail: info@somanomori.or.jp

NPO活動の原点

岐阜県立森林文化アカデミー学長

熊崎 實



これまで、医療や教育、環境保全などの社会サービスの提供は、国や自治体の専管事項とされてきました。しかしその結果、国や自治体の負担が膨らみ財政が危機的な状況になっています。また「官」の仕事はとかく硬直的で効率が悪く、ときどき腐敗なども報道されるものですから、すっかり評判を落してしまいました。今では規制緩和・民営化の大合唱です。しかし、何もかも市場経済にまかせられるかという点、決してそうではありません。利潤がなければ私企業は手をつけないからです。非営利団体NPOが本領を発揮するのは、純粹の「官」でも純粹の「私」でもうまくいかない、中間領域にあるといつてよいでしょう。

森林保全や地域林業の振興においても、中央省庁↓地方自治体↓森林組合という「官製」のラインで施策が実施されてきました。ところが地域林業は依然として不振を極め、管理放棄の森林は広がるばかりです。この分野でも、御多分にもれず、NPOへの期待が大きく膨らんできました。「杣の杜 学舎」はそうした期待に応えるべく設立されたNPO法人です。非営利組織では資金調達が難しく、ある程度公的資金に依存することになりますが、同時に民間企業と同じような事業展開の能力が要求されます。これは口でいうほど簡単なことではありません。運営面でさまざまな困難が待ちうけているはずで、安定した運営ということになれば、過度の公費依存になったり、利益重視に走りやすい。

そんなとき、いつも思い起こして欲しいのは、NPOの使命は、あくまで社会的な価値の創造にあるということです。具体的には「地域の森林をよくする」といったことが目標になるでしょう。地域の人たちからの熱い支持が不可欠の条件です。非営利組織で働く人びとは基本的にはボランティアですから、社会的な使命をしっかりと胸に秘めて、地域の人たちの共感が得られるような活動を展開してもらいたい。そのような活動がつけられていけば、どのような困難に逢着しても、必ず道は開けてくると思います。

スタッフ紹介

柚の杜 学舎の中心メンバーとして活動していく三人の専任スタッフから、それぞれ自己紹介いたします。出身も経歴もバラバラの三人ですが、みんな、森への熱い思いを抱いています。

NPO法人 柚の杜 学舎 設立にあたって

NPO法人 柚の杜 学舎 代表理事

鈴木 章



はじめまして、NPO法人 柚の杜 学舎代表の鈴木と申します。私たちの設立した柚の杜 学舎は、昨年十一月に特定非営利活動（NPO）法人の認証を受けることができました。二〇〇三年度より継続的な活動に移るために現在準備中です。今回、広く会員を募集しましたところ多くの方から問い合わせや入会の申し込みをいただきまして有難うございました。会員の皆さんと共に森林環境の再生活動

に取り組んで行きたいと考えておりますので宜しくお願いします。

まずは我々スタッフの紹介をさせていただきます。現在専任スタッフ三名とアカデミーの学生、教員の協力スタッフで柚の杜 学舎を運営しています。専任スタッフ三名は、現在は岐阜県立森林文化アカデミーの学生をしており、ことし三月に卒業できる（？）予定です。（とは言っても、年齢は三十代半ばから四十代前半のおじさんです。）それぞれ、過去の経歴を持っておりますが、三人とも「日本の山の現状はこれでもいいのか。」という疑問を解決するために森林文化アカデミーにやってきました。そして、その疑問に対する答えがNPO法人 柚の杜 学舎の設立だったわけです。法人設立に当たっては、幸い多くの賛同者を得ることができ、アカデミーの先生方にも正会員として協力を得られる環境が整いました。森と木の学校である森林文化アカデミーのある美濃市を拠点に様々な活動を展開していく予定です。

現在、会員の皆さんとの活動予定は、美濃市の小倉公園整備活動や岐阜市・各務原市山火事跡地再生プロジェクト（柚の杜 学舎は担当者会議の正式メンバーとしてプロジェクトに参加しています）、そして間伐や枝打ちなどの林業技術の講習をしながら人工林の再生をめざす森林塾の開催を企画しています。準備が整い次第ご案内をさせていただきます。未来の地球のために汗を流すことが私たち

の大切な仕事です。今後とも柚の杜 学舎を末永くご支援ください。

「柚の杜」への道

NPO法人 柚の杜 学舎 理事

山中 亘



皆さん、こんにちは。柚の杜 学舎専任スタッフ山中と申します。まずは自己紹介というか、柚の杜 学舎をやるに至ったこれまでの自分の経緯を紹介させていただきます。

最初に林業に携わろうと思うようになったのは、やはり数年前に環境問題に興味を持ったのがきっかけだったと思います。環境問題について色々勉強するうち、このままでは本当に地球はやばいな、子孫に良い環境を残せないぞという気持ちを強く持つようになり、何かできることをしたいと思うようになりました。それもできれば、自分の生業として生涯やっていけることはないかと模索しました。なかなかうまく見つけることはできませんで

したが、そんな中で岐阜県の森林愛護隊という森林ボランティアの活動に参加して林業という仕事に興味が湧いてきました。

その当時から林業の後継者不足は言われており、それなら自分がやってやる!という気持ちと、ボランティアレベルだけでやっていては、なかなか森はよくならんということも感じておりました。しかし、やはり未経験者であること、年齢的なこともあり、簡単には仕事先が見つかるものではありませんでした。(その頃やっていた測量関係の仕事も忙しかったこともあって、真剣に探すということも無かったですけどね。)

そのうち某アウトドア雑誌に岐阜県に森林文化アカデミーなる学校ができるという広告が載っていて、説明会の日程も掲載されていたので、これはと思い、説明会に出かけ、アカデミーが自分の求めている所だと感じました。それで、ダメ元で試験を受けたら、ラッキーにも受かってしまいましたので、これは人生最後のチャンスと思い、思い切って入学しました。そのアカデミーで現・代表理事の鈴木さんにNPO立ち上げに誘われ、色々迷いや不安もありましたが、ここまで来たらここも思い切ってやってみるかという気持ちになり、柚の杜学舎設立に加わったというわけです。

個人的には生まれ育った岐阜県の森が放置され、どんどん悪くなっている現状をなんとかしたいというのが、気持ち的にはベースと

なっています。それが原点です。とはいえ、過去に経験のある他のスタッフ二人と違って、私は林業技術・知識に関してまだまだ素人に近いので、アカデミーを卒業した後も勉強勉強ということになるでしょう。しかし、やっとな自分がやりたかったことをようやくやれそうなので、頑張っていきたいと思っています。

あと、自分がこういうことをやっていくことで、まずは自分の周りの人達が少しでも森や川、自然に対して関心を持ち、良くしていくという気持ちになってくれたらなあと思っています。それと柚の杜学舎の中では経理事務も担当しておりますので、会員の皆様とは接点も多くなると思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

二十一世紀は市民パワーが世の中を変えていく時代とも言われています。共に日本の森を良くしていきましょう!

「森への想いをカタチに」したい

NPO法人 柚の杜学舎 理事

若月 亨

昨年四月のこと。卒業を一年後に控え、遅ればせながら進路についてあれこれ思いを巡らせていた私に、「NPO法人を立ち上げたいんだが一緒にやってくれるか?」と声を掛け

てきたのは、現・代表理事の鈴木氏でした。

森林文化アカデミーでは鈴木氏と私は別の科に所属しているのですが、一昨年の夏に、岐阜県が主催した「高性能林業機械オペレーター養成研修」などを共に受講したのをはじめ、アカデミーの実習の現場でも度々一緒に現場作業を行ってきました。昨冬には、鈴木氏が主宰する森林ボランティアグループ「やまいきフォレストスターズ」の一員として、雪害木の処理などの活動にも参加してきました。そうした、山で一緒に過ごす時間の中で、鈴木氏は折に触れて、卒業後は自分の事業として山仕事をしたいという夢を話してくれました。それは次第に私の中で、進路の選択肢の一つとして捉えられるようになっていったのです。

とはいえ、それをNPO法人としてやってみたいという鈴木氏の誘いには、正直、大きな戸惑いを感じました。私にはNPOという言葉さえ馴染みのあるものではなく、それが山仕事にどうつながっていくのか、すぐには理解できなかったからです。

アカデミーに来る前の三年間、私は北海道の小さな民間会社で造林の作業員をしていました。社長は将来の林業を担う若い人材の育成に熱心な人であり、私にも期待を掛けてく





れていたし、職場そのものに大きな不満を持っていたわけではありません。アカデミーへの入学は、日々現場で過ごすだけでは叶わないスキルアップの場と考えたからでした。したがって、林業を取り巻く現状への強い問題意識が芽生えたのは、アカデミーで学び始めてからのことです。山村の人たちはなぜ山に目を向けなくなってきたのか。山を覆うスギやヒノキやカラマツがなぜ放って置かれているのか。どんな森を造れば山の環境は守れるのか。誰が山を守るのか。そうした様々な問題が自分の上で渦巻き、背中にのしかかってくるようにさえ感じるようになりました。NPOについて少しずつ勉強を進めていくうちに、これはひょっとして、問題解決の大きな力になりうるかもしれないと思うようになりました。岐阜市・各務原市山林火災跡地の復旧活動に加わる中で、本当に多くのボランティアの方々が現場に来て汗を流している姿を目にして、森林や環境を守りたいという真摯な思いが、一般の人たちの間に確実に広がってきていることを実感したのも、その理由の一つです。森への思いを持った人たちが集まり、確実な知識と技術を身に付ければ、山を守っていく力になれる。既存の林業のシステムでは対応できなかった部分に、その力を振り向けることができないか。そのための仕組みづくりは、NPOとして実にやりがいのある仕事ではないか。

「とにかくやってみよう」というのが、今

の心境です。資金面等クリアすべきことは沢山ありますが、自分たちの腕を鈍らせぬよう山仕事に汗を流しつつ、同志の輪を広げて行きたいと思っています。
力不足ではありますが、よろしく願っています。

山の杜倶楽部通信

このコーナーでは正会員、賛助会員、山の杜倶楽部の皆さんと専任スタッフで進めていく、森林ボランティア活動、林業体験教室、自然教室等の情報を発信していきます。

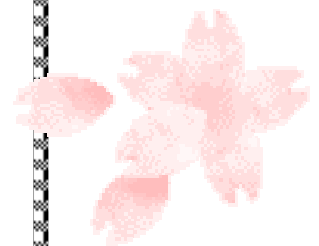
さて記念すべき最初の活動ですが、多くの方が参加できるよう里山整備のボランティアを計画しています。「桃太郎」のおじいさんは山へ柴刈りに行きました。つい三十年くらい前までは、里近くの雑木林（＝里山）から背丈の低い木（＝低木）を刈り取って燃料としていたわけです。他にも落ち葉を集めて堆肥にしたり、コナラやクヌギ等の背の高い木を二十〜三十年毎に切り倒して薪や炭として利用していたのです。切り株からは新しい芽が出て元の林に戻っていきます。こうして里山を利用することで、里山の手入れが行われ再生されていたのです。手入れされた里山は明るく開放的で、季節折々に楽しめます。

しかし薪、炭、堆肥が使われなくなり、里山が見向きもされなくなりました。こうなると里山の環境が変わっていきます。どんどん木が密生して林の中は昼でも暗くなり、藪に阻まれて人が近づくことさえできなくなるのです。こうなってしまうた里山の草や低木を刈り採って、再び明るい気持ちの良い林にしようと思っています。

詳しい計画は専任スタッフと詰めています。五月十七日（土）から月一回ペース、場所は美濃市の小倉公園の予定です。作業だけでなく、自然観察等の森林レクリエーションも絡める計画です。決まり次第ホームページ等でお知らせします。

この他にも、森林塾等の開催を企画しています。これからの山の杜倶楽部通信にご期待下さい。

（小泉）



まじゅうの
きまぐれ指数

100%
コラム

会員の皆様、こんにちは。理事の山中です。この度、会報の創刊にあたり、コラムの連載の依頼を受けました。内容は堅苦しくないものを(自分も堅苦しいのが苦手なキャラなので)ということなのですが、連載できるいいテーマがすぐに思い浮かばなかったもので、当面はきまぐれに書かせてもらいます。(毎回内容が変わるかも。)

それで今回は、僕の大きな趣味の一つである映画の紹介をしたいと思います。思いつきですいません。やはり、こういう団体なので、映画紹介も木や自然に関するものにした方がいいかなと思ひ、まず思い浮かんだ映画は「さくら」です。(某テレビ局の連続ドラマとは関係ありません。)これは十年近く前に公開された映画で岐阜県出身の神山征二郎監督の作品で実話を基にした映画です。

主人公は佐藤良二さん(演じていたのは、ウルトラマンタロウでお馴染みの篠田三郎さん)という旧国鉄バス(時代は昭和四十年代)の車掌さんで、名古屋と金沢を結んでいた路線バス沿いにサクラの木を植えて太平洋と日本海をサクラで繋ごうという一見夢物語の様なことを実現しようとした方のお話です。その内容は題名とは裏腹に壮絶な話の展開になっていきます。佐藤さんは物語の途中でガンに冒されたりするのですが、それでもサクラを植え続け、家族のことも顧みず、春に路線沿いがサクラの花で満ちることを夢見てひたすら植え続けます。しかし……。あまり内容を話してしまっただけいけないので、これくらいにします。主人公の夢実現に賭ける熱い想いと我が身朽ち果てようとも実行していく執念が悲しくも観る側の心に熱く伝わってきて、人の生き方など色々考えさせられます。

今年も間もなくサクラの季節が巡って来ます。そんな時、こんな作品を観、実際にあった話として何かを感じられてはいかがでしょう? ちなみにこの佐藤さんの想いを「走り抜ける」という形で受け継いだ「さくら道国際ネイチャーラン」というマラソンイベントが毎年四月に開催されています。



これまでの活動

二〇〇二年十一月、柚の杜学舎はNPO法人として認証されました。それから今日まで行ってきた活動を振り返ります。

◎ 第二回「みんなの力で緑を」大作戦の準備作業・ボランティアへの技術指導(十一月)

昨年四月五日に発生した岐阜市・各務原市林野火災、岐阜新聞・岐阜放送、岐阜県、岐阜市、各務原市などが中心となって、県民協働「緑の再生プロジェクト」として復旧活動が続けられています。

十一月十六日(土)に行われた、第二回「みんなの力で緑を」大作戦では、八〇〇名を超えるボランティアが植樹活動を行いました。柚の杜学舎では、この活動のための歩道の設置や会場の整備などの準備作業を五日間にわたって行いました。当日は専任スタッフ三名が技術指導者として、一般のボランティアの方々への植樹の技術指導を行いました。

林野火災跡地復旧活動ではこの他に、各務原市立蘇原中学校の「権現山蘇生大作戦」(十二月)や地元住民による「権現山再生大作戦」(二月)で、地ごしらえの作業指導などを行いました。

◎ 全国植樹祭に向けた間伐見本展示林の整備・看板設置（十一月～二月）

二〇〇六年、岐阜県益田郡での開催が内定している第五七回全国植樹祭に向けた、間伐見本展示林の整備（萩原町）と、間伐材を用いた看板の下呂実験林への設置（下呂町）を受託し、作業を行いました。

◎ 武儀郡洞戸村の民有林でのヘリコプター集材補助・造材作業受託（十一月）

林道の整備されていない奥地での効率的な集材手段として、この地域でも期待が大きいヘリコプター集材。一月下旬に洞戸村の民有林で行われたヘリコプター集材で、土場での荷外し、造材作業を行いました。

◎ 岐阜県立武儀高等学校での危険木等の処理（一月）

森林文化アカデミーにとってはお隣の学校である武儀高校。敷地の周囲の危険木や半ば藪と化した雑木の伐採を委託され、作業を行いました。伐採した樹木は森林文化アカデミー構内で、炭焼き用の薪に加工したり、チップ化して散布する

などの処理を行いました。

◎ 岐阜県立森林文化アカデミー演習林での間伐（十二月～二月）

森林文化アカデミーには、古城山から連なる裏山に約三十ヘクタールの演習林があり、毎年少しずつ間伐が進められています。柚の杜 学舎では約一・五ヘクタールの作業を受託し、伐り捨て間伐を行いました。

これからの活動予定

◎ 第三回「みんなの力で緑を」大作戦に向けた準備活動

来る三月中旬に予定されている第三回「みんなの力で緑を」大作戦に向け、柚の杜 学舎スタッフも担当者会議のメンバーとして準備に加わっています。ボランティア活動のための現地の整備等も行いう予定です。

◎ 柚の杜倶楽部 いよいよ活動開始

「柚の杜倶楽部通信」でお知らせしていますように、五月十七日（土）より柚の杜倶楽部の活動が始まります。会員のみなさんにも

気軽に参加していただけるよう、身近な里山の森林整備活動からスタートする予定です。最新の情報は、ホームページにてお知らせしていきます。

◎ 第三回 世界水フォーラム in 滋賀
森林分科会

三月十九日（水）～二十一日（金・祝）に滋賀県で行われる第三回世界水フォーラム in 滋賀の森林分科会に、柚の杜 学舎 代表理事・鈴木 章がパネリストとして参加します。分科会では森林の公益的機能拡充協議会関係県（群馬・栃木・山梨・長野・岐阜・奈良・滋賀―通称・海なし七県）の代表者が、森林の役割と森林整備のあり方、その役割分担と連携のあり方、合意形成の手法などを議論します。事例発表とパネルディスカッションで、柚の杜 学舎の取り組みについて報告を行う予定です。

編集後記

二月に入って、急に暖かくなりました。この春、私達スタッフは卒業と新規事業のスタートという、人生何年度目の節目を迎えています。同時に個人的には非常に辛い季節の到来です。そう、花粉症。朝、車の窓に降りかかった花粉を見るだけで、鼻がむずむずしてきます。耳鼻科には、花粉症対策のポスターにできるだけ外出は控えましょう。できるだけ言われてもねえ。まあ、山に入れば、あの不快感も忘れてしまいますが、部屋にこもっての編集作業。今日もくしゃみが止まりません。

若